



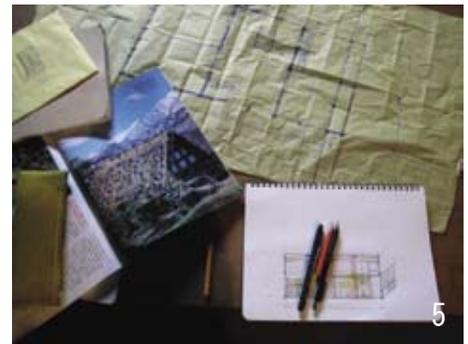
2



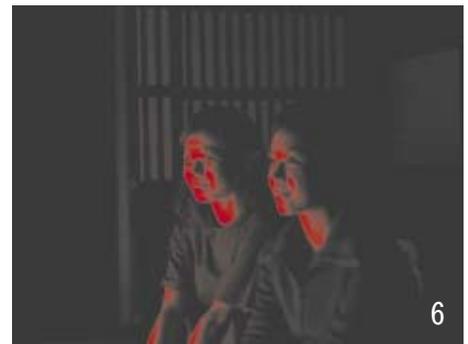
3



4



5



6

に対して、囲炉裏際で20～5ルクス。3mくらい離れると2～0.5ルクスと言ったところである。この数字の通り確かに暗いではあるが、数字だけではない効果がある。

それはその火によって浮かび上がる人の表情である。自然と火の周りに集まった人の表情を下方からゆらゆらと浮かび上がらせる囲炉裏の火。それは陰影が美しく、心落ち着かせるものである。目が慣れると室内全体もわずかな灯りで照らし出され、大きな梁や大黒柱が火の灯りで揺らめき生きているように陰影を躍らせている。

日頃、あふれるような明るさの中で暮らしている私たちは、このような自然の陰影の美しさを忘れていたような気がする。昔の人はこのような火の灯りの中で暖をとり、

煮炊きをしていたのだろう。現在から見れば決して機能的な明るさとは言えないが、作業をする必要に応じて明るさ（火の強さ）が調節されるような仕組みは必要充分であったのだろう。そして夜がふけたら自然と寝ていたのであろう。今回はあいにく天候に恵まれなく、月あかりを体験できなかったが、このような環境の中で月あかりや星々のひかりはさぞかし美しいことだろう。夜には非常に寒く、少々過酷な調査であったが、火の灯りの繊細な表情を感じることのできる良い機会であった。

（田中 謙太郎）

1. 今回の宿泊先「無名舎」前で全員集合
2. いろりを囲んでミーティング
3. ろうそくの灯りの測定。ゆらめく炎が室内を浮かびあがらせる。
4. 建物の実測。古い建物と資料を見ながら四苦八苦。
5. 差し込む日差しで元でスケッチ
6. いろりのあかりでほのかに照らされる

# 照明探偵団 in London

London, England 2002/09/08-13

窪田 麻里 + 田中 智香

今回の照明探偵団 in London、現在開発の進んでいるテムズ川沿いに、近年開通した Jubilee Line の Westminster 駅から North Greenwich 駅までを各駅下車で調査してみた。

1863年に世界で初めての開通となったロンドンの地下鉄“tube”は、向き合った座席に人の膝が並べばその間を取って通ろうとは思わない程サイズ的には日本のそれより一回り小さく、駅全体も古く暗いイメージがあるが、新しい Jubilee Line は日本でいうところの都営12号大江戸線で、色々な建築家が1つ1つ駅をデザインし、新たな地下空間を創造している。

駅舎のデザインが違えば当然照明計画も各駅様々。アワードをとった駅の一つ Westmin-

ister 駅は、つぶした六角形と長方形の組み合わせのようなコンクリ梁天井に白い中華なべのようなリフレクションパーツとアッパーライトのユニット。お隣の Waterloo 駅は、古い煉瓦造りのワインセラーを思わせるアーチ柱の建物で、天井はそれになぞらえたかのようにメタルでアーチ面が形成され、そこにリニアのアッパーライトが連なっている。

Southwark 駅で地上に出て徒歩でテート・モダンそしてミレニアム・ブリッジへ。日中と夜と二度足を運んだのだが、テート・モダンの青と紫のビミョーな発光体クラウン部や全面ガラスの7Fに溢れる光といった夜の景は、屋間の印象ほどにぱっとせず、ミレニアム・ブリッジにいたってはフットライトとしてライトチューブが入っていたものの点灯しておらず、

それ以外橋下のアップライトも何も照明は無しで期待はずれ…。7月に竣工したばかりのフォスターのロンドン市庁舎は、形のインパクトもさることながら、夜になると内装の黄色が照明によって一層際立ち、建物の外へにじみ出てくるようだ。

川沿いの照明は、クリアなボールがトップのオーソドックスなポール灯と、それをネックレスのようにつなぐ小さな白熱ランプといったシンプルなものだが、行き交う水上バスの灯りが揺れる水面に移り、そんな川沿いの夜景をベースに、現在進んでいる Thames River 沿いの再開発では市庁舎の他にも目玉建築達がまだまだ竣工を控えている。個性的な光の華が次々と添えられてゆくであろうことを思うと、是非また数年後この地を訪れてみたい。



1



2



3



4



5

1. Westminster Stn. コンコース
2. Waterloo Stn. コンコース
3. ロンドン市庁舎
4. ミレニアムブリッジからテートモダンを望む
5. LONDON TUBE map

# 第19回 研究会サロン 2002年8月28日

街歩き、団長のワールドカップ観戦記、ビルバオ美術館体験談など

夏も終わりといってもまだまだ暑い8月の末、今回のサロンは30度を超す気温にもめげず集まってくれた団員のみなさんのもと開催されました。

## ■街歩き報告

まずはじめに8月19日に実施された横浜大棧橋と赤レンガ倉庫の街歩き報告が行われました。最初に報告をしたのはシンガポールに在住しているシェン団員。彼は大棧橋のコンペの行方をずいぶん前から興味深く見守っていて、大きく期待をしていたそう。今回の街歩きの他にも個人的に日中に訪れてその昼夜の状況を比較したりしたようです。そんな彼は、「昼はダイナミックかつ有機的な建築なのに夜の光によっては何もそれらの特徴が生かされていない」ことを残念がっていました。他の団員たちからも、木の質感を生かすような光やきれいな芝生のための光などは全く見受けられなかったと報告されました。「結局予算が問題で、照明も後付けになってしまったのが問題なのでは」というのが参加者全体のまとまった意見のようでした。

## ■団長のワールドカップ観戦記

前号の探偵団通信「面出の探偵ノート」でも掲載しましたが、サロンでは再び写真を紹介しながらのワールドカップ観戦レポートが行われました。決勝戦だからといってただただ楽しく観戦するわけじゃありません。この貴重な機会に団長は自らスタジアム照明をチェック。夜間の試合ということもあってもちろんスタジアム照明は全点灯。ピッチ内の水平照度はもちろんのこと、スポーツ施設にあつては全方向の空中照度も必要なのでどんなにグレアに考慮しても照明器具のどれかはこっちを向いている状態です。

「きっとプレーしている選手たちも眩しいに違いない。いったい誰のための照明なのか……」と思ったときに団長はテレビ中継での観戦を思い出し、その照明環境の恩恵を最も受けることができるのがテレビによる中継であること気付いたそう。選手の顔やボールの足さばきなど、そのさまを忠実に映し出すために必要な光はグレアと相反するところに存在していたようです。

## ■団長のビルバオ美術館体験談

さてつづいては団長がスペインのビルバオに行った際に訪れた「ビルバオ・グッゲンハイム美術館」についての報告です。団長の持論では「美術館はその内部に美術品を内包する空間であり、建物そのものはシンプルかつ機能的であるべき」としていたそうなのですが、この建築はシンプルとはほど遠くて……それでもここを訪れた人がみな高く評価しているのが気になって「一度この眼で確かめなければ」とかねてから思っていたそうです。そしてついにここを訪れた団長の感想というのがズバリ、「脱帽」。想像をはるかに超えた迫力ある造形美、複雑だけれども回遊性のある見事な空間構成となっていたとのこと。残念ながら内部は撮影が禁止されているため団長がこっそり撮影した数枚の写真しか披露されなかったのですが、照明に関しても複雑な建築にシンプルながらも様々な展示形態に対応できるシステムが整っていたそうです。やっぱり美術館の照明は「シンプルかつ機能的」につきるのかもしれないね。

## ■ヒカリモノ

さてさてこの日のヒカリモノは、古川団員の所属している会社 TOTO の照明付きハイクオリティ鏡の紹介です。どこがハイクオリティかというと、その薄い本体の裏に冷陰極管が仕込まれていて、その光を正面にもってくるのにきちんと設計された反射板を使用しているところなのです。鏡の前は（とくに女性にとっては）やっぱり顔を明るく見せたいもの。かといってブラケットなど出っ張るものは付けたくない……という人にはうってつけかもしれません。このほか季節ものとして光るうちわなども紹介されました。

(橋本 八栄子)



1. 横浜・街歩きの様子を紹介
2. 熱狂のワールドカップの様子を面出団長が解説
3. 照明付き鏡を紹介する古川団員
4. 妖しげに光る青いうちわ

# ライトフェア 2002

San Francisco, U.S.A 2002/06/03-05

森 秀人 + 田中 謙太郎



1. 開催されたモスコニセンター外観
2. 床埋込型 LED パネル
3. 壁埋込 LED インジケーション
4. 長寿命ハロゲンランプの展示

## ■ ライト・フェア・インターナショナル

会場はサンフランシスコ中心部ヤーバブエナ・センター内（再開発地区）にあるモスコニ・コンベンションセンター。今回のライト・フェアでは、長寿命・省電力をアピールした光源が目立ち、一般的な照明器具（ダウンライトやスポットライト）などを展示しているブースは少なかった。特にLED（発光ダイオード）を使った器具は多く、主流はライン照明やインジケーションなどのサイン照明としての器具が多く出展されていた。LEDは消費電力も少なく、サイズも小さく納められるので将来が期待される光源である。最近では以前よりも高輝度のものが開発され、照度確保可能な器具が生まれつつある。一般的な蛍光灯などは安定器との組み合わせにより2倍の長寿命化（12000hから30000h）したランプが発表されていた。またハロゲンランプでも2倍以上の長寿命化（2000hから5000h）したランプが発表されていた。



## ■ サンフランシスコ再開発地区

サンフランシスコの中心地の北東側に位置するヤーバブエナ・センターは、1961年から着手し、約30年の歳月をかけて1990年に完了した再開発である。以前は古い居住区で犯罪が多いエリアであった。現在ではライト・フェアが開催されたモスコニ・センターをはじめ、多目的ギャラリーや劇場、美術館（SFMOMA）などがあり、文化・芸術の場として広く利用されている。この計画は広大な敷地を有するコンベンションセンターを半地下にし、その上部を庭園として計画されている。これらのエリアでは、街中では見られない少し変な照明器具（主にポール灯）が立っていた。広場を照らすポール型スポットがハイポールについているものや、昼間は真っ直ぐで夜になると首をグルッと廻して光を出すものなどがあり、昼間の形だけでなく場所と機能を考慮した配置が施されていた。夜間は比較的明るく、犯罪などが起きにくいように配慮されているのだろう。



1. SFMOMA ファサード
2. パーク内の発光ポール



# 面出の探偵ノート

●第30号 2002年08月7日(水)  
Guggenheim Bilbao 万歳!

PFrank O. Garry の設計した Bilbao Guggenheim Museum を積年の思いで訪ねました。なぜ積年かという、そこを訪れた誰もが「大変いい美術館でした」という賛辞を送るばかりで、あのぐじゃぐじゃした不可思議な形態の美術館を悪く言う友人に会ったことがなかったからです。どうしてか……。あのぐじゃぐじゃした……。う〜ん……。自分の目でしっかり見なければ。

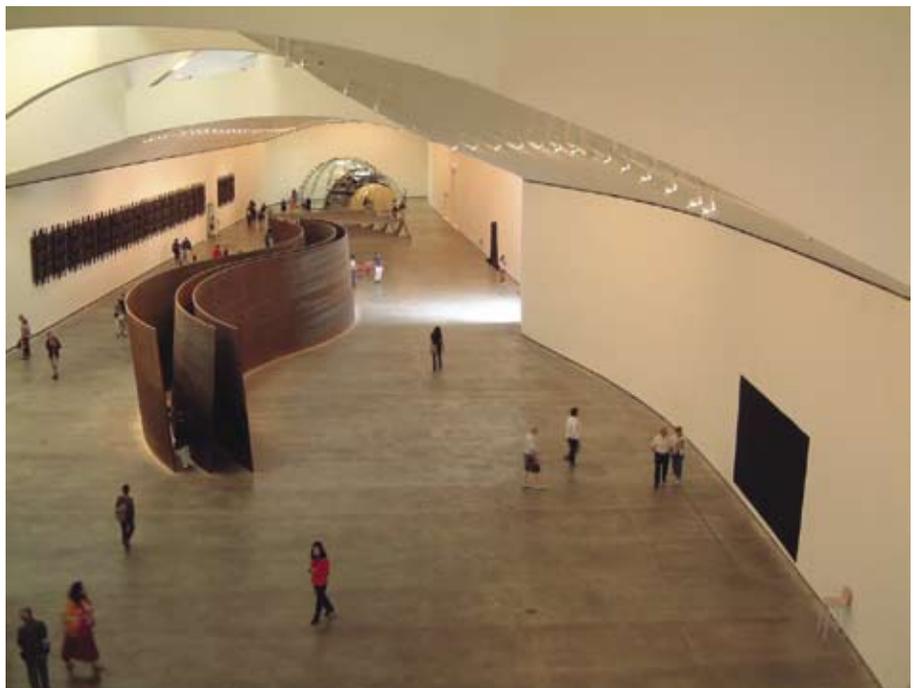
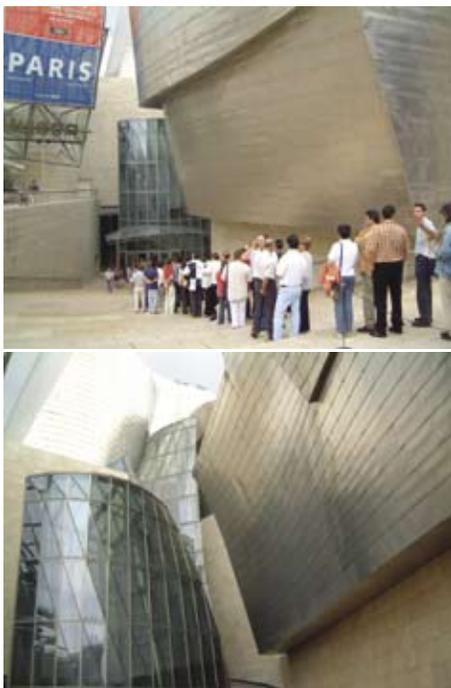
というのも、私は半ばこの F. O. Garry という鬼才の臭いを嫌っていた感があり、美術館というのはできるだけ楚々として、かの Louis I. Kahn の名作のように強く自我を主張しないものだ、と信じていたからです。特に現代アートを収めるための美術館という器は、極力シンプルに機能的に展示空間のフレキシビリティを保証すべきで、Garry の建築はあまりにそのものの芸術性を狙いすぎている、と批判していました。彼の押し付けがましく有り余る個性を好きになれなかったのです。だから、かの Frank L. Right 設計の本家 NYC の Guggenheim でさえ、建築的には見事だけれど、螺旋状のスロープ展示室は、やはりいただけない…と思っていたし、Hans Holain のいくつかの名作でさえ、好みではなかったのです。

しかし、この美術館には脱帽しました B 私の浅薄な想像は打ち砕かれました。すばらしい美術館です。建築は人を自然に回遊させるすばらしい彫刻作品になりえました。こんな複雑怪奇な寸法と形態をしていながら、そこに安置されている多くの現代アートより以上の迫力ある造形美を見せています。切り取られた空間の形とボリュームに引き付けられます。これは建築家が芸術家の端くれとして十分に認められるべき成果です。

私は偶然、ほぼ1年前に NYC で開催された Garry の建築作品展を見る機会を得ました。おびただしい数の設計プロセスを示す図面や模型が展示され、その設計にかかるエネルギーに圧倒されたのですが、それよりも、こんなにたくさんのゴミのような建築模型を、しかも何十年も捨てずに保存していることにびっくりしました。普通だったら「そのゴミ捨てろ!」というようなものまで丁寧に展示されているのです。つまり、自分たちのデザインの結果だけでなく設計の格闘そのものを、かなり重要に誇りを持って語る機会を待っていたに違いないのです。とてつもなくエネルギッシュな展覧会でした。

Bilbao では1階から3階までの展示室を細かく回遊してきました。残念なことに館内での写真撮影が禁止されていました。なんと心の狭いことでしょう。もちろんいくらかは黙って撮影してきましたが。照明はすこぶる簡素で十分な効果のシステムに集約しています。天井直付けにされた箱型のウォールウォッシャー器具と、低電圧スポットライトがペアになったもので、色々な展示に対応しています。それと建築構造を少しライトアップしているスポットは梁と同色(グレー)に塗られた低電圧スポットです。ERCO の自信作だそうで、彼らの PR 誌に詳しく紹介されています。とても複雑な建築にシンプルな照明システム。照明器具の存在は目立つのですが、それをわずらわしく感じさせないほどの迫力ある内部空間でした。ひたすら脱帽、眼からうろこ……の体験報告まで。

(面出 薫)



# 面出団長講演

## World Lighting Fair in TOKYO 2002

10月3日から5日まで、パシフィコ横浜を会場として行われた『World Lighting Fair in TOKYO 2002』。

舞台やホールでの演出、エンターテインメント照明を中心とした器具の展示会が行われましたが、そのフェアのイベントとして10月4日（金）に面出団長が講演会を行いました。

“Architectural Lighting Projects for Theaters and Halls 1991-2001” というタイトルで劇場やホールの照明について紹介しました。トークセッションを行った海外の建築家からの質問も様々で、建築照明に対する関心の高さが伺えました。



講演会場風景



他の講演者とのトークセッション

## ★★投稿募集中★★

照明探偵団通信 vol.15（次号）の原稿を募集しています。独自の照明探偵レポート、光に思う今日の日本、照明について知りたいこと、疑問に思っていることなどなど、テーマは何でも結構です。日頃ひかり、あかりなどについて思っていることや様々なレポートを照明探偵団通信に発表してみませんか。原稿は、e-mailで送付して下さい。メール上記述でも原稿テキストファイル添付でもOKです。投稿お待ちしております！

照明探偵団・事務局  
〒150-0001 東京都渋谷区神宮前 5-28-10  
ライティングプランナーズ アソシエーツ  
TEL : 03-5469-1022 FAX : 03-5469-1023  
e-mail=tanteidan@lighting.co.jp <http://www.lighting.co.jp/tanteidan/>

【照明探偵団の活動は以下の23社にご協賛いただいております。】

ルートロンアスカ株式会社 岩崎電気株式会社 松下電工株式会社 東芝ライテック株式会社 小糸工業株式会社 三菱レイヨン株式会社  
ヤマギワ株式会社 株式会社ウシオスペース 山田照明株式会社 マックスレイ株式会社 オーデリック株式会社 ニッポ電機株式会社  
株式会社エルコ・トートー 株式会社ウシオユーテック 日本フィリップス株式会社 小泉産業株式会社 株式会社遠藤照明  
大光電機株式会社 湘南工作販売株式会社 金門電気株式会社 ヨシモトポール株式会社 日本電池株式会社  
トキ・コーポレーション株式会社

## 照明探偵団日記

先日衣替えをしました。照明探偵団は冬であろうとも亜熱帯の国に行く可能性もあるので、Tシャツたちをたんすの奥深くまではしまうことは出来ませんでした。引き出しを開けたらすぐ見えるところには秋冬色の服を並べてちょっと気分は秋。衣替えをする時は大抵大掃除になります。いつも捨てられないものを一気に捨ててすかついてみたり、ポストカードを季節に合わせて変えてみたり。今回は以前から変えたい変えたいと思っていたベッドスタンドもこれを機に衣替え。で、スタンドが売ってそうなお店に見に行きました。無い・・・。とにかくシンプルで柔らかい白熱のあかりのものであればというだけなのに、意外と思いついた通りのものって無いものです。結局「普通の暮らしにもっとデザインを」というコンセプトでお手頃価格のスタルク作”miss sissi”を購入。点灯すると、ポリカーボネートを透かした柔らかなあかりが美しい。同じ空間が全く違って見えるから、ほんととあかりって不思議です。

（田沼彩子）